
願わくは君とともに

高坂 正之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願わくは君とともに

【Nコード】

N4447G

【作者名】

高坂 正之助

【あらすじ】

白河純史は、少女と出会う。運命の悪戯が引き合わせた、対極の二人。少女は他人の心を読むことができた。故にこそ、少女は知っていた――自殺志願者。自傷癖者。多重人格者。天才。超絶的変態との出会いで、平凡だった純史の日常は動き始める。これは、勘が異常なまでに鋭いこと意外は至って平凡な高校生と、“自殺志願者”の少女が繰り広げる、奇妙な同居生活や学園生活を描いた、恋愛物語。

プロローグ（前書き）

自殺願望を持った少女と、
生存願望を持った少年の物語です。
ぜひご覧下さい。

プロローグ

0

「“生きたい”って感情はさ、どんな欲求よりも——どんな願望よりもどんな祈りよりもどんなエゴよりも、どんな、どんな、どんな欲望よりも、醜くて汚くて、理解できないものなんだよね」

あるいは、きっかけなど、理由など、動機など、初めから存在していなかったのかもしれない。

ただ——最も身近な人物の死を、終わりを、終焉を目の当たりにしたばかりだった僕は、やはり少し敏感で。

多分、恐怖を覚えていたのだと思う。

死という事象に。

そして、希望を見出そうとしていたのだと思う。

生という営みに。

死は、生は、両者ともかけがえない希望であり、また堪えがたい絶望でもあった。

死は、生は、両者とも狂おしいまでの信奉対象であり、そして、愛おしいほどの憎悪の対象でもあった。

そんな生を。

そんな死を。

他者から奪う権利が、たった一人のちっばけな人間如きに、果たして存在するだろうか。

他者から生を、あるいは死を奪うこと。

それは――罪だ。

償いようもないくらいに、重く残酷な背徳行為なのだ。

贖罪は不可。免罪は認められない。

完全無欠の、罪業。

そして僕は、犯してしまった。

彼女から奪ったものは、かけがえのない“死”。狂おしいまでの“死”。

彼女に強要したものは、耐え難い“生”。愛おしいほどの“生”。許されることは、未来永劫、輪廻を超越したところで、あり得ない。

それでも僕は償わなければならなかった。

犯してしまった罪を。

死を望む彼女に生きることを強要した、残酷で非道な大罪を。

だから、彼女は言った。

「これは、契約。決して償い終えることのない罪を、あなたが償い終えるまでの、契約」

心から死を望む彼女と。

心から生を望む僕との。

残酷なまでに、

互いを肯定し。

そして否定し、

完膚なきまでに、

互いを受け入れ、

そして突き放し。

残酷なまでに、

互いを癒し、

そして傷つける。

堅く脆く強く弱い契約が、

こっくに、

結ばれた。

「違うね。生きたいってのは――」

第一話「コロとじろと心と心奈」（上）

1

目玉焼き——愛らしくもどこかグロテスクな響きを含んだ名称を以って庶民に広く親しまれるその簡素料理かんその奥深さといったら、それはもう人類が作り上げた言語による表現可能領域を、絶対的に超越うえつしてしまっているといつてまったく過言でないように思えてならない。焼き加減から、黄身の硬さ、黄身を崩すタイミング、そして調味料まで——片面焼き、両面焼き、半熟、固焼き、醤油、ソース、塩、胡椒、マヨネーズと、挙げてみれば永久に終わりが見えることはなく、組み合わせは無数に、無窮むぎゅうに存在する。

目玉焼きを調理し、食べる——ただそれだけの過程を経るだけでも、僕らはその中で数え切れないほど多くの選択を強要されてしまわう。それはなにも目玉焼きのみに限られたことではないが、凡そ（おおよそ）すべての行為いゝゐ、事象じしやう、行動いゝどうには、膨大な数の選択肢が必然的に付帯ふたいするもの。

それ故、その選択の労を省くべく目玉焼きを半液体状のヘドロのような、原型をまるで留めていないくらいに歪ゆがめた形で完成させたとしても、僕が責められるいわれはまったくないのである。

「……何かな？ これは」

「見て分かるだろう。目玉焼きだよ」

「……どうも私の知ってる目玉焼きとはまるで違うみたい。私の中では、少なくとも目玉焼きは固体の物質だよ」

そんな皮肉たっぷりの台詞と共に、我が家の同居人にして血縁的にはまったくの他人である少女、幻中心奈まほなこしな（まほなここな）——心奈は、流され忘れたまま便器に残る排泄物でも見るかのような容

赦のない侮蔑の眼差しを、僕が愛情を込めに込めて作り上げた半液体状の物質に対して向けてきた。人様の作った料理に対して文句を向けるという圧倒的に失礼な心奈の態度を、しかし許容してやる親切な僕である。

「まあ、食べよ。ただでさえ身体ちっこいんだから、食わないもたないぞ」

「こんなの食べたなら、逆に卒倒しちゃうそうだけどね……まずさ、どこが黄身でどこが白身なのかな？　まあ黄色も白もこの物体には見られないけど」

「液体は箸じゃすくえないよ」などと悪態を吐きつつスプーンを要求してきた心奈は、それでも特に抵抗する素振りを見せることなくごく素直に、言われた通り目玉焼きを口にする。

「どう？　そこまで悪くないだろ」

「うん。見た目よりはね。泥と砂の中間みたいな味。それより、あつくんは食べないの？」

「ははは。さすがの僕もそんなヘド口を食べる気にはなれないな」

「……掃除機でぶん殴ってもいい？」

「断固拒否する」

心奈は頬を膨らませながら精一杯の鋭い眼光を僕に向けてくるものの、正直言って迫力は皆無である。

白い肌。艶のある唇。小さい、というよりはむしろ幼いという表現が当て嵌まるような、小柄な体躯。仄かにウェーブのかかった漆黒の長髪は、ロリータチックに——男心を刺激して止まない要素を十二分に備えた彼女がそんなふうに見えちゃうのが関の山だった。せるところか逆に可愛く見せてしまうのが関の山だった。

「むー。相変わらず、あつくんてば失礼なやつだよー」

「げ……また読んだのか。禁止だって約束だろ？」

おまけに。

心奈には——“力”があった。

おとぎ話に出てくるような、不思議で異常で現実離れた——“

力”。

馬鹿馬鹿しくも極めて厄介で、必然的に他者を遠ざけてしまう――
“力”

他人の“ココロ”の中身を、まるで書物を読むかのように自由に読むことができるという、常軌を逸した“力”。

そんな“力”が――彼女にはあった。

「――あう。ごめん。……んー。まだ常時オフには慣れないみたい。自然に発動しちゃう」

心奈、つまりはこの“力”の持ち主曰く――迷惑にして便利にして脅威にして、プライバシーという概念などまるで眼中に入れることなく無視したこの“力”は、彼女が心理学的知識を修得しているだとか、読心術に長けているだとか、そういった根拠に起因するものではないらしい。

あくまでもどこまでも、特殊能力なのだそうだ。

心理学など一度も学んだことはなく、必然、読心術を身に着けているわけもなく、物心ついたときには、既にこの“力”は自分に備わっていたと、彼女は言っていた。

文字通り、人のココロを“読む”ことのできる“力”。

読心術を“guess”とすると、心奈のこの“力”は“read”に当たると。

つまるところ、他人の動作や言動、態度から“読む”、というものではなく、本棚から読みたい本を引っ張り出して“読む”、という感覚に近いと、そういうことなのだろう。

言うまでもなく、僕とて最初から心奈の人間離れた特殊能力を信じていたわけではない。どんなに精巧で緻密で不思議なマジック（手品師たちに言わせれば“イリュージョン”）。さらに心奈に言わせれば、手品師たちも“マジシャン”）をTVで見かけたとしても、感嘆するよりもまずトリックを疑ってしまうような捻くれた性格をしている僕だから、むしろかなり懷疑的だった。しかし、8重の口ツクをかけ、その上で50字のパスワードを設けてまでパソコン内

に隠していた数々の健全な欲求を、僕のパソコンに触れてもいない、
ていうか初対面だった彼女にずばりと言い当てられては、もう信じ
るしかなかった。

「まあ、それは仕方ないか。だんだんと慣れていけばいいよ」

「……そだね。——およ。もうこんな時間。そろそろ準備したほう
がいいんじゃないの、あつくん」

ちゃっかりと空になっていた食器を重ねながら——どこか話をは
ぐらかすかのように、心奈は告げる。

よくもあの物体を完食できたものだとしばかり感心しながら改
めて自分の格好を見てみると、上下寝巻きにエプロン（防御用）、
寝癖だらけの頭髮、そして左右で明らかに種類の違う靴下と、およ
そ登校にふさわしい格好であるとは言い難い。

「——ん。じゃ準備してくるから、リビングで待つてくれ」

「時間になったら、迷いもなく躊躇もなく容赦もなくあつくんを置
いて家を出るけど、待つてるね」

それを待つているとは言わない。

ひとつ屋根の下に住む同居人のものとは思えないような、まるで
情を感じ取ることができない発言だった。

「急げ急げ急げ」

余談になってしまふけれど、慌てているときや急いでいるとき、
僕はあえて焦燥感を煽る言葉を自発的に口にするにしている。
危機感を、頭だけでなく耳からも感じようという寸法だ。“急がば
回れ”という言葉があるが、冗談ではない。急を要する事態に於^おい
ては、つまりは急を要するのである。

しかし、慌てていればそれだけ集中力が散漫になってしまふとい
うのも、また疑いようなない事実であるのは確かなわけ。

「ん……」

何やらは磨き粉が苦い。いつものようなミントの爽快さはなく、
ケミカルな、それでいてしつこいような不快な味が口の中に広がる。
どうやら磨き粉を間違えてしまったらしかった。

ていうか、洗顔フォームだった。
顔を洗うための化学薬品だった。

「う、ぐ、ぐええ……」

吐き気。

自分の口の中を満たしているのが洗顔フォームだと自覚すると同時に、凄まじい吐き気が僕を襲う。

目の前の鏡に映っていたのは、顔を青白く変色させた、僕。

そして、そんな僕に対し極めて怜悯な視線を向ける心奈。

「急がば回れ、だよ。あつくん。それじゃあね」

私立伯愛学園高等部、つまりは僕らの通う高校の名を一度たりとも耳に入れたことのないような人間は、おそらくこの県内においてはまるで存在しないものと思われるが、そんな高知名度の背景には、確かな理由が主に二つ、存在していた。

まず第一に、学園規模の壮大さである。

荘厳と形容したところで、なんら矛盾を孕まぬまでに巨大。かつ豪華。中世ヨーロッパの城郭を髣髴とさせるバロック建築の校舎は、一目には、いや、見慣れたところで、とても高等学校のものには見えなかった。

と言いたいところではあるのだけれど、さすがにヨーロッパの絢爛なバロック建築というのは少しばかりオーバーで、建築様式自体はごく普通のもの。それでも、いわゆる一般的な高校よりは遥かに規模の大きな校舎である。外観も内装も設備も、城郭とまではいかないにせよ、高等学校としては十分すぎるほど、豪華にして広大にしてハイテクだった。

次に、アホかというくらいに安い授業料。下手をすれば、標準的な公立高校の授業料よりも遥かに安い。その上、充実した奨学金制度をも用意しているという周到さ。学生支援もここまでできてしまう

ともはや嫌味の領域である。

こうも魅力的な要素を備えた学校に、人気が集中しない道理などはなかった。当然、毎年例外なく入学志願者が殺到し、倍率も偏差値もそれに伴って引き上げられた。高校受験時の僕の学力如きでは、仮に正面から堂々と、正攻法で挑んだとすれば、入学などは到底敵わなかっただろう。

ここで、なぜ僕如きがこの学園に入学することができたのかという疑問が浮かぶのはあまりに必然であり、僕にはその疑問に対する答えを明らかにするという義務が歴然として付帯するわけだが、その解はあまりに単純にして難解、理解不能である。

まず、入学試験がマークシートであったということ。そして、異様なまでに、本当に異常すぎるほどに“勘の冴え渡っていた”あの時の僕は、このテストでほぼ満点を取ってしまったということ。この二つに尽きる。本当に単純で、かつ理解不能だ。合格発表時に一番驚いたのは、間違いなく疑いもなく、他ならぬこの僕自身だろう。かくして僕は平穏な学生生活を営み（勉強に関してはまったく平穏ではなかったが）、現在はこの学園の二年四組に籍を置いている。置かせていただいている。

「げ、今日の三限って体育だっけ？ まいったな。ズボン忘れた」

「じゃあ私の貸してあげようか？ ブルマでいいなら」

「いいと言うとでも!？」

「うん。だって今チラっと思ってたもん」

「…… オフにしときなさい」

などとかくだらないやり取り——習得単位数ギリギリの僕にとって、は、存外くだらなくもなく、むしろ重要ですらある——を交わしながら、僕たちは教室へと続く廊下を歩く。下駄箱から教室までの距離も、少なくとも近くはないので、正直歩くのは面倒この上ない。

そもそも。

校舎が広大であるというこの学園の長所は、僕にとっては長所になり得ないものなのかもしれない。初めは誰しも、巨大で厳か

な校舎に憧れるものである。入学して、しばらく経過してから気づくのだ。巨大さ故の欠点に。億劫さに。不都合さに。面倒さに。遅刻数分前（0 x 2）に登校してきた場合、まず間に合わない。荷物をすべて放棄し、かつ全速力で疾走したと仮定しても、チャイムが鳴り終える前に教室までたどり着ける可能性は限りなく0に近い。むしろ等しい。そんな経験を既に52回ほど味わっている僕だからこそ、断言に近いかたちで言えるのである。

「なに威張ってんだか……」

「く……」

ちなみに心奈は、憎たらしくも見事に遅刻0回という記録を守り続けている。だが僕は褒めてやるということなど絶対にしないだろう。なぜならこの女、僕が間に合いそうになくても（二人分の朝食やら洗濯やらをこなしていたという理由であつたとしても）、容赦なく先に登校してしまうからだ。一分たりとも待つてくれたことはない。心奈の分の弁当を作っていたのにも関わらず置いていかれたときは、さすがに死にたくなった。

「何よりも生に執着しているあつくんが、何を言ってるんだか」

「ほつとけ。……ってお前また人の心を読みやがつて」

「あ、いつのまに！ うむ。よし、オフにしたよ。これであつくんがどんなスケベなことを考えているかわかりません。正直怖いです」

「僕はそんなに変態に見えるかな！？」

「だってあのパソコンの中身は」

「僕は変態でした！」

実に卑劣なやつである。心奈は。

実に臆病なやつである。僕は。

だが、それが心奈でそれが僕で、それが僕でそれが心奈で。

それ以外の、なにものでもなかった。

そして、そんな互いの関係を、

心地よいと思ってしまう僕がいた。

他方で、憎悪している僕がいた。
またまた他方では、崩れぬよう、ひと時も目を離せぬ僕がいた。
僕しかいなかった。

2

鋭い針で力を込めて皮膚を突き刺せば、当然血が出る。
強靱なナイフで全力をもって動脈を裂けば、必然鮮血が噴き出す。
重厚な金属バットで完膚なきまでに頭部に撲撃を加えれば、断然
頭蓋骨は粉碎する。

では、針よりも鋭く、ナイフよりも凶暴で、バットよりも重い“
言撃”を、すべてをかけて相手のココロにぶつけたら。

心は出血するだろうか。

鮮血を噴き出すだろうか。

砕け散るだろうか。

ココロとは曖昧なものだ。身体のように確固として存在している
わけでもなければ、しかし決して存在しないと断言できるものでも
ない。その概念、存在価値は各人によって多種多様、相対的である
と同時に無限の捉え方が存在している。

そうでなければ、個々の性格というものはすべて、例外なく同一
となってしまうからだ。人類補完なんて計画が成立でもない限りは、
ココロが万人にとって共通の代物であるなどという状態には
なり得ない。なってはならない。

だから、究極的には受ける傷も当然、必然、断然、非常に曖昧で、
相対的なものとなる。各人それぞれダメージの大きさは異なってい
く。ときにはチェーンソーで両断された傷をも上回り、ときには虫
に刺されたような、傷にも満たない微小なダメージを残す。

少なくとも彼女が受けた心の傷は、針で突き刺されたときのそれを、ナイフで引き裂かれたときのそれを、バットで殴られたときのそれを、チェーンソーで引き裂かれたときのそれを、絶対的に、究極的に、天文学的に上回っていた。

それほど大きな傷と比較してしまえば、今まさに僕が味わっている心的衝撃など、まったくもって取るに足りない程度の矮小なものなのだろう。

「ドMで変態で、どうしようもないくらいにくだらない存在で、その上特に言及すべき長所もないどころか、短所の塊と言っても過言ではない、むしろ足りないほどに論外な人間……まあ人間の、白河純史くん。お早う」

こんな失礼な朝の挨拶をかましてくるような狂乱的DS女によって僕の名前が初めて文面に登場してしまったという心的衝撃など、取るに足りない程度の矮小なものなのだろう。

矮小なものなのだろう。

「ああ、おはよう。今日も朝から毒舌をどうも、花蓮」

「眠気覚ましにはちょうどいいでしょ？」

「おかげで眠気どころかやる気も土気も勇氣もなくなったよ」

「もともとそんなものないでしょ。あなたにあるのは、そうねえ。」

「……………」
「三点リーダ二十個分って、現実時間に換算するといったいどれくらいなんだろうな……………」

華やかな名前とはまるで対照的な毒舌を浴びせつつ、天城花蓮はその極端なまでに均整の取れた顔に、にこやかな笑みを浮かべた。いったいどこをどう間違えて育てば、こうも残酷にして加虐的な人格が形成されるのだろうか。いまだかつて、僕は呼吸をするよりも遙かに自然に、それがごく当たり前のように他人を中傷する人間を見たことがない。言ってしまうえば天然悪。しかし、こんなにも残酷な毒舌を毎朝毎昼毎晩浴びせられても尚、彼女をまったく嫌いなれないというのだから、案外僕は純粋なマゾヒストなのかもしれ

ない。

「およ、花蓮ちゃん、おっはよ〜」

「あら、お早う心奈ちゃん。今日もすつごくかわいいわね」

にこやかに挨拶を交わす美少女二人組。その純粋な笑顔の百億分の一くらいはわけてくれてもよさそうな気がするのだが。

「なんで僕だけいつも扱いがひどいのかな？」

「えーとうーん説明するのがまばたきの百億倍ほど面倒なのだけかどうかーめんどくさいなまったく」

「せめて文章間に句読点くらいはつけようよ！」

諦めて、自分の席に向かう僕。これは敵前逃亡ではない。無駄な争いを避けるための、いわば戦略的撤退だ。人間、流されるままに受動的に存在している限り、そこには必然的に争いが生じる。戦いを避けることは、平和主義とは、むしろ積極的行動の成果であり、誇るべきことなのである。だから僕は臆病者などでは決してないし、まして敗北者などでは断じてない。などと言い訳を考えている時点で、僕は臆病者の敗北者に違いなかった。

「元気出してください、白河さん。あれ、花蓮ちゃんの愛情表現なんですよ。今流行の“つんでれ”ってやつじゃないですか」

この少女にこそ花蓮——可憐という名が似合いそうなものを、どうしてあの凶暴にして残虐にして暴君の名を恣ほしにしている花蓮が花蓮なのだろうか。花蓮が聞いたら、きつと精神崩壊を起こしかねないまでの暴言を返してくるに違いないような隠匿指定A級の危険思考を巡らせつつ、僕は声の主——二重羽音ふたえはねに言葉を返す。

「それは違うよ、羽音ちゃん。ツンデレっていうのはね、“デレ”の部分を見せなければ、それまでの“ツン”が効果を発揮することはないんだ。まあ、逆に“ツン”がなくてもだめなんだけれどね。

“デレ”のない“ツン”など、ただの嫌悪表現に過ぎないんじゃないかな。何より萌えることがない。ツンデレは萌えなければ意味がないんだ。萌えることが必要不可欠な要素なんだよ。僕はそれをツンデレとは呼ばないよ。いや、呼べないね。ううん、呼んではなら

ない」

「ふうん、奥が深いのですね……」

いわゆる“そっち系”と呼ばれるような特殊な趣味も持たない人間（女性に限定される場合が多い）が聞けば新幹線と同等の速度で四十歩ほど引いてしまいそうな発言を真剣に受け止め、その上納得したような態度を示す羽音ちゃん。この優しさこそが彼女を彼女足らしめるゆえんなのかもしれない。

しかし、それにしたって世の中には本当に様々な人間がいる。無論、人にはココロというものが曖昧ではあるにせよ存在しているわけで、内面が人それぞれであるのはまったく頷くべき、というより頷くしかないことであるのは明白なのだが、しかし僕の周囲の人間は些（ちひ）か個性が強すぎるのではないかと思うことが多々ある。外見も含めてだが、そこかしこ見渡せば一人や二人はいるだろうというようないわゆる地味な人間が、僕と交友関係を結んでいるという範囲に限定すれば、いないに等しいのだった。至って普通の外見と人格を兼ね備えているという微塵の自慢にもならない自負を抱いている僕にしてみれば、あまりに濃厚な人間たちとの交流の中で、もともとないに限りなく近い僕の存在感が完全に消滅してしまうのではないかというあながち冗談ではないような事態の発生を必然的に危惧してしまうのである。

自殺志願。自傷癖。多重人格。天才。超絶的変態。登場人物の個性を強調した漫画でも見ているのだろうか、僕は。

僕は。

こんなにも平凡な人間だというのに。

生きることに執着した、ただの凡俗な人間に過ぎないというのに。だってそうじゃないか。

生きたいなんて、誰にだって共通の欲望だろう。いや、欲望と呼んでしまうのもおこがましいほどに、それはあまりに“普通”の欲求。極限状態にでも陥らない限りは、意識することすらない“当たり前”の無意識ですらある。そう思っていた。死にたいと口にする

人間はいるけれど、そういう人たちだって、心のどこかで“生きたい”と思っっているに違いないと。

「だけど彼女は、僕の欲望を“異常”だと言った。

醜悪なものを見るような目で、嫌悪を痛いくらいに表現したような動作で、長年蓄積された憎悪を凝縮したような声で。

“異常”だと、僕に言った。

「あの……大丈夫ですか？ 顔色があまり優れないようですね」
羽音ちゃんの声で、僕ははっと我に帰った。

いけないいけない。考え事していると、ついつい深いところまで思考が潜っていつてしまう。極端にネガティブな僕の悪い癖だった。

考えてみれば、ネガティブでマゾヒストの僕が平凡な人間だといふのもおかしい話なのかも知れない。

「大丈夫だよ、街並みは条坊制に基づき区画整理され、都の東西に官営の市を設置、そして中心には幅七十五mの朱雀大路が、さらにその奥には、天皇の住居や政治の中心である平城宮を置いていたといわれる平城京に、ちよつと住んでみたいなあって思ってたただけから」

「そうですね。ならいいのですけれど……あの、私なんかでよければ、いつでも相談に乗りますから。お一人で思いつめないでください」

「……ありがとう、羽音ちゃん」

優しい言葉が、傷ついた僕のココロに染み渡る。が、ツツコミがないというのは些か寂しいものがあつた。どうやら羽音ちゃんとそういったやりとりを期待するのは諦めたほうがいいらしい。

ホームルームの開始を告げるチャイムが響く。遅刻しまいと必死で教室に向かっている生徒は、この地獄の底から湧き上がるかのよな音を聞いて、その歩みを止めるのである。落胆と悲痛が交じり合ったような表情を浮かべながら。まあ、僕のことだけね。

チャイムの音に次いで、教室に金髪のロングヘアを揺らせた“少

女”が入ってくる。150センチにも遠く満たない身長を胸を張って精一杯伸ばしてみせ、堂々とした態度で、少女は教壇の上に上がった。

「ほいほい、それじゃ、ホームルームをはじめちゃうよん。日直さん、号令おねがい」

我らがクラス——二年四組が正担任、美好ぼたん。御年、おんとし十五歳である。

第一話「コロコロと心と心奈」(中)

3

「よかつたら今日の下着の色を覚えてくれないかな？」

武良武羅雄^{たけむらむらお}は、欠片ほどの躊躇もなく迷いもなくも容赦もなく、微塵の羞恥心も疎外感も違和感も覚えることなく、呼吸をするようにまばたきをするように心臓を動かすように、挨拶であるかのように義務であるかのように宿命であるかのように、ごく自然にごく必然にごく当然に、そう言ってみせた。

変態。

この場合、生物が幼生から生態になる過程で形態を変えることなく、性的錯綜があり、性欲や性行動が普通とは変わっている状態を指す。

“変態の中の変態”(エロス・オブ・エロス)。

“性欲の海”(セクシャルシー)。

“女好男嫌”(ウルティメイタム)。

“性聖”(セイクリット)。

周囲の変態たちから、畏敬の念を込めた様々な“異名”で呼ばれる彼。

彼の変態ぶりは、男女関わらず、僕らの立毛線を刺激してやまない。

彼がひとたび行動を起こせば、周囲の警察を総動員させる。彼の配下の変態たちは、数知れず。

“支配者”(セクシャル・マスター)——武良武羅雄。僕の親友である。

「い、いやですよ。そんなの教えられません」

もはや恒例となったこのやり取りに、律儀にもきちんと恥じらい

を含んだ反応を返す羽音ちゃん。本当に偉い。真面目だ。そんな羽音ちゃんを見て、武羅夫はその端正な顔にはおよそ似つかわしくないようないやらしい笑みを浮かべた。淵の黒い眼鏡の位置を直すような仕草をし、目に軽くなるほどの前髪をかき上げる。

「なあに、別に構わんがね。この眼鏡は服を透視する機能を持つ。隠したって無駄なのさ。君の制服のその下は、俺には丸見えだよ、羽音ちゃん」

「あうあう……」

目に涙を浮かべ、自分の腕で全身を隠すような仕草をみせる羽音ちゃん。

恒例だ。

あまりに恒例。

あまりに日常。

あまりに当然。

あまりに反射。

日常生活の一環、挨拶代わりに必ずと言っていいほどの頻度でセクハラを敢行する武羅雄。故に心奈を始めとする周囲の女子たちは彼のセクハラ行為に対する絶対的な免疫を備えているのだが、羽音ちゃんだけはいつまでたっても新鮮で恥じらいのある反応を返すのだった。可愛かった。

「おい、武羅雄。そろそろセクハラやめてやれよ」

そして、止めるのは僕の役目なのだった。

いい加減慣れてもいい頃だけれど、羽音ちゃんは本当に心の底から恥じらいを持った可愛い少女なのだ。そもそもセクハラに慣れるということ自体がかえって問題ではないだろうか。武羅雄は今のところ手を出してはいないが、将来遭遇するセクハラでも同じ結果になるとは限らない。いや、今に武羅雄が本気で手を出してくる可能性だって否定はできない。何より、羽音ちゃんの感謝と敬意に満ちた愛らしい眼差しを向けられるのがたまらない——というのは心奈しか知らないのだが。

「うわ、純史！ お前、今日はハート柄のピンクのトランクスかよ。ありえねー」

「……」

自分でも豪語していたが、武羅雄のかける黒縁眼鏡——その名をラゲナロウ神殺——には、透視効果があるらしい。

いや、さすがに冗談だとは思うけれど。そんな男の理想をそのまま実現したような究極の神器がこの世界に存在するわけがない。冗談じゃなかったら武羅雄を撲殺してでも絶対に奪取する。

いや、僕が欲しいというわけではなく。あくまで武羅雄のセクハラ行為を阻止するために、ね。断じて我欲じゃあないよ。

ちなみに今日の僕の下着はピンク＆ハートのトランクスだった。

「あ、あの、人の下着の色とか、軽々しくばらすのは、よくないと思います！」

完全に真剣な表情で、自分の中の勇気を一気に集中させたかのような勇敢な声色で、武羅雄に食って掛かる羽音ちゃん。やはり冗談が通じない子だが、そこが彼女の魅力でもある。っていうか無駄に真剣なところが素で可愛い。

「そっかそっか。そうだね。確かに他人にばらすのはよくない。なら、本人にだけこっそり言うならいいよね？ 今日の羽音ちゃんの下着の色は……」

そう言つて、武羅夫は羽音ちゃんにそつと耳打ちする。

瞬間、羽音ちゃんの顔は“ぼんっ”という効果音になるほどの勢いで真っ赤に染まり上がり、次いで彼女は超高速のダッシュを以って教室から飛び出していつてしまった。

「……」

もしかビンゴだったのだろうか。いやいや、そんなはずはない。きっと、男子の中でも指折りの美少年である武羅雄の顔が耳元まで接近したことが恥ずかしかっただけだろう。羽音ちゃん、そういった免疫はまるでなさそうだし。仮に武羅雄が羽音ちゃんの下着の色を言い当てたのだとすれば、僕は武羅雄を倒さなくてはならなくな

る。世界平和のために。これ以上の被害を、犠牲者を、出さないために。心奈の前では考えることはできないけれど。

「いつものこととはいえ……羽音ちゃんは純粋な子なんだから、あんまちよつかい出すなよ、武羅雄」

「かかか、いやいや、セクハラは俺の生きがいだぜ？ それに相手の反応が面白ければ面白いほどやりがいがある」

最低の人間が吐く台詞だった。

僕たちはもう慣れてしまっているけれど、初対面の人間——およそ彼の実体を知らない人間が初めて彼と接するとき、なまじ顔の造りが端麗であるだけに、それはもうとんでもない反応が返ってくるのである。僕とて例外ではなかったが。羽根ちゃんのオーバーとも取れる反応も、最初の頃に比べれば随分とマシになったものだった。さすがに病院送りはやりすぎだ。

この男と始めて対面したとき。

僕は戦慄を覚えた。

僕だって男だ。“そういうもの”に興味がないわけではないが、それでも彼に“同族意識”を抱くことなど到底できなかった。存在の規格が、そもそも違うのである。

人間の三大欲——「食欲」、「睡眠欲」、「性欲」。この三つの欲のうち、こと「性欲」に関しては自意識による厳重な規制を必要とする。

腹が減れば食事を摂る。眠くなったら寝る。

では、性欲が溜まってしまったら。性欲の対象を蹂躪できるか。

普通の人間にはそれができない。なぜならばそれは、現代社会においては重大な背徳行為だからだ。人間は“意識”で“欲”を抑制することができるよう、巧みに創られた。

しかし、“セクシャルマスタ支配者”——武羅雄は三大欲の中でも、性欲が飛び抜けて深い。

故にこそ彼の内側では、自意識による性欲の抑制が難しく、“性欲>意識”というような本能的不等式が成り立ってしまうのである。

今はまだセクハラ行為のみに留まっではいるものの――セクハラ行為を留まっていると表現するのには多少なり罪悪感が伴うが――今後彼が大人しく牙をしまっておくという保証は、どこを どう探しても存在しない。

そう考えてしまうほどに、彼の存在は、僕に衝撃と恐怖を与えすぎたのだ。

「……ねえあつくん。友達に対してそんなこと思っるのはさすがにひどすぎだと思っただけど……」

「お前が突っ込んでくれて、よかった」

冗談で心中独白していたら、いつの間にか引き返せないところまでできてしまっていた。これではまるで武羅雄が怪物ではないか。

本当はただの変態。えろ。ばか。以上。

「ところで、心奈」

「ん？ 何かな？ 本当はセクハラシーンを見たくて仕方がないのにもかかわらず羽音ちゃんの純真な好意を得たいがために彼女を助けている不純なあつくん？」

「……今日の帰り道、商店街でも寄ってくか。好きなもん買ってやる」

「わーお！ あつくん太っ腹〜！」

「……」

これでもかというくらいに邪気をたつぷりと満遍なく豊富に含んだ無邪気な笑顔を浮かべる心奈。

「っていうか、さすがに僕もそこまでは思っていない……」

「わーお、あつくん太っ腹〜」

隣では変態が心奈の真似をして（しかも気色の悪いことこの上ないジェスチャーつきで）いたので、八つ当たりに渾身の力を込めに込めたボディーブローをぶち込んでおいた。

「あ、白河くん白河くん。お願いがあつたりなかつたりあつたりなかつたりあつたりしちゃうんだけど」

昼休み——食堂での昼食を終えて教室に戻ろうとしていたところで、美好先生に声をかけられた。大量の荷物——おそらくは教材だろう——を細すぎる両腕に積み上げた形で抱え、その重さに若干、苦痛の表情を浮かべながら、ばつが悪そうに。

大方、これら荷物を運ぶのを手伝ってくれと言われるのだろうが、そもそもこんな大量の荷物、最初から先生一人で持とうと思う時点でいくらか無理がある。それほど量だった。

「あ、ぼたん先生！　ちゃーっす！　今日もキュートでハートフルですね！　あの、まだ今日の下着の色聞いてませんでしたよね？」

ここで変態が喰らいつく。

「え？　水色だけど？」

教師も教師だった。

僕は先生の抱えている荷物を上からそつと取り上げ、自分の腕に抱える。

……重い。

とてもじゃないが、あんな細腕で容易に抱えられる重量ではない。「引き受けますよ。この荷物、どつかの教室に運ばいいんですよね？」

「あー、違う違う！　生徒に対してそんなこき使うようなマネはできないよ」。あのね、委員長さんに、これから委員会があるって伝えてほしいんだけど……」

「……」

どこまでお人よしなのだろうか、この人は。

たったそれだけのことで、ばつの悪そうな表情を浮かべないでいたきたい。逆にこちらが罪悪感を覚えてしまう。荷物運びを手伝わせる——いったいどこが生徒をこきつかうような行為なのか。教師としては、理想に近いとはいえず甘すぎる気もした。

しかしその親切で愛らしい人柄は、教師としても、人間としても、

彼女が周囲の生徒たちに愛されているという事実を示す証拠でもあった。

先生は、「だめ、かな？」などと小声で呟きながら、こちらを伺う。

「もちろん、いいですよ。伝えられます」

僕は先生に答える。

先生は安堵したような表情を浮かべた。

「だけど——」僕は先生の荷物を奪い取り、続ける。

「だけど、この荷物を運ぶのも手伝わせてもらいます」

「うえっ!? い、いいいいいよっ! それはあたしの仕事だし、

白河くんは昼休みをエンジョイしなきゃ!」

先生は慌てたように、荷物の奪還を試みる。

しかし僕は荷物ごと腕を高く上げることにより、それを阻止した。重さに腕が震えるが、ここは男の見せ所というものだ。

「取り返したかったら、どうぞ。……届けばですけど」

「……むー。意地悪だね、白河くん」

先生は何度か飛び跳ねて僕から荷物の奪取を試みたものの、ついに観念したようで、拗ねたような、それでいて笑ったような曖昧な表情を浮かべながら、そう言った。

「つつーことで、変態。僕はこれから先生の手伝いをしてくるから、先に教室に戻っててくれ」

「ほいほい。軽く5人くらいにハラスメントしながら帰るわ」

言うや否や、変態は早速近くの女子に声をかけ始めた。

相変わらず行動が早い。

「……それじゃ、行きましょう、先生」

「そだね。ありがとね、白河くん。こっちだよ」

先生は歩き出し、僕はそれに並ぶようにして、歩く。

軽く勉強の話や、危機的状況下にある成績の話、そして他愛のない世間話などをしながら、僕たちは目的地を目指した。

美好ぼたん——我らが2年4組正担任にして、日本最年少の教師。

15歳。僕よりも、2歳ほど年下の、“少女”。

資格云々の話はよく分からないが、こうして教職に携わっている以上、彼女は既に大学課程を終えているのだろう。はたして日本国に飛び級制度なんてあったのかと疑問に感じないこともないものの、そこはそれ、実物が目の前にいるのだから、彼女自体が結論だ。

腰の高さまで伸ばした金髪のストレートヘアはツーサイドアップに。青いリボンはウサギの耳のようにぴよぴよこと躍動している。顔の作りも、年齢相応の幼さを見せるものの、非常に整っていて可愛らしい。

……こうしてみると、ただの可愛い女の子なんだけどなあ。

「ん？ どったの白河くん？ 人の顔ジロジロ見ちゃって？」

「あ、いえ……。それよりこの荷物、どこに持っていくんです？」

腕にかかる負担をリセットするかのように荷物を一度持ち直し、先生に問う。

「んとね、体育倉庫」

「……」

体育……、倉庫？

三好先生の担当教科は、化学。およそ体育倉庫とは関係のない教科のはずだけれど……。実験で使うものなのだろうか。この学園には文理区別が存在しないので、文系型の僕も三好先生の化学の授業は受けている。しかし、そんな妙な実験が教科書に載っていたか。さすがに教科書をすべて見終えたわけではないのはつきりとは分からないが、高偏差の高校に籍を置いている以上、僕とて予習くらいはしている。少なくとも予習範囲——だいたい一ヶ月先程度か——には、そんな実験はなかったように思う。この広大な学園には相応数の教師が在籍しているので、基本的に教師はひとりあたりひとつの学年しか受け持たない。だから、他学年の授業という可能性もほとんどないに等しかった。

「体育の秋庭先生に頼まれちゃってね。……えへへ。まだ新米だし子供だし、これくらいの雑用はしないと……。さ。ほら、除け者にさ

れちゃうのとか、やつぱつらいし。ただでさえあたしみたいな子供教師は奇妙な存在だったのに、これ以上余計な波風とか、立てたくないからね！」

精一杯明るく見えるような——そんな、無理をしていることがまるでばれればれの笑顔を浮かべて、先生は言った。

ばれればれの笑顔を浮かべて、言った。

「……」

あのゴリラ……。

15歳の教師。傍目に見れば、明らかに異端の存在。

明晰に過ぎる頭脳。超凡な才能。

しかし、その頭脳も才能も。尊敬の対象になると同時に、妬み対象ともなる。

異端を排除し、周囲を平常化させようとするのは、人間の、否、動物の本能。

弱肉強食ならぬ、強肉弱食。

「……先生」

「ん？ 何かな？」

振り向く彼女の笑顔は、あくまでも明るかった。

「……僕、あの変態のことが大嫌いなんですよ」

「変態って、武良くんのこと？ だめだよ、白河くん。友達なんだから、ちゃんとなかよくしないと」

そう答える彼女の笑顔は、明らかに純粹だった。

「だから、もし、先生が、他の先生に用事とか頼まれたりしたとき——こうして呼んでくれると嬉しいです。あいつから離れる大義名分になりますから。それと、僕ってこんな性格だから友達少ないんで、たまに話し相手になつてくれるとさらに嬉しいですよ」

「え——だって白河くん、武良君とも仲がよさげだし、友達は結構いるじゃ——」

彼女の笑顔は、若干の陰りと戸惑いを含んでいた。

「先生。僕は困ってるんです。“困っている生徒を助けるのは、先

生の役目”って、先生の口癖だったと思いますけど」

僕の笑顔は、純粹なものだったと思う。

ココロから、純粹な笑顔を浮かべられたと思う。

「……………うん！ わかった！ 仕方ないなあ、“純史くん”は」

先生の笑顔は、とても明るくて、純粹で、そして嬉しそうだった。賢い先生のことだ、僕の言いたいことを、言葉の意味を、きっと理解してくれていることだろう。

「それでこそ、先生ですよ。“ぼたん先生”」

生徒と教師。

だから何だ。

それ以前に僕らは人間同士だ。

友達になりたい人と友達になって、何が悪い。

こうして僕の個性的な友人の一人に——美好ぼたんは、追加された。

「ふう、到着。お疲れさま、純史くん。これを置いたら、戻っていいからね」

「はい」

ぼたん先生、僕の順で、体育倉庫に入っていく。薄暗くて周囲はよく見えないが、土のような汗のような、不快な匂いが鼻をついた。「……………若い男女が二人きりで体育倉庫に。なんかえっちなシチュエーションだね」

「このマセガキがつ！」

「やだなあ、純史くんだって、ちよつとは考えたりしちゃったりしなかったりしちゃったりしなかったりしちゃったり……………」

「まあ、少しは……………って僕は武羅雄か！」

「え？ けど最近じゃあ、武良くんよりも純史くんの方が変態って呼ばれることが多い気がするけど」

「そ、それはみんな武羅雄に免疫があるからで……………それに、男は誰だって……………」

ああ、もうなんか僕が変態みたいな流れになっているじゃないか。言い訳をしている時点で終わっている。

「だめだよ、えっちなことばっか考えてたら。何か別のものかという煩惱を発散しなきゃ。ゲームとかでもいいしね」

「……先生も、ゲームとかするんですか」

まだ年端もいかない少女とはいえ——ぼたん先生のような才女ともなれば、本やら勉強やらに興味は偏るかと思っていたのだけれど、それはさすがに偏見というものか。

「うん、エロゲーとか！ 楽しいよ！」

「あんたは教師だが明らかに18歳未満だ！」

それに、生徒にエロゲーを勧めるな！

あんたこそ煩惱の塊だ！

「あはははは！ まったく、冗談だよ冗談！」

「はあ……」

なんだか、どっと疲れてしまった。

けど同時に、とても楽しかった。

才女にして、気さく——彼女が同じ生徒として僕らと出会っていれば、大量の友人が常に彼女の周りを囲んでいたことだろう。

こんなに面白い人と友達にならないなんて、教師たちは、本当に愚かだ。

こんなに面白い人と友達になれたなんて、僕は、本当に運がいい。ぼたん先生の無垢な笑顔を眺めつつ、僕はふと、そんなふうに思った。

第一話「コロコロと心と心奈」(下)

5

“容赦”、またはそれに近い意味を含む単語を、まるで掲載していないであろう辞書を脳髓に搭載する心奈の暴飲暴食暴買のせいで、僕の財布も心中も、非常に寂しいものとなってしまった。こんなことになってしまふならば、調子に乗ってケーキの大食い対決なんてしなければよかったと後悔する。

「ま、金ならいくらでもあるんだけれどね——」

両親の仏壇の前に、独白。

彼らが僕に残してくれた、莫大な遺産。研究者として、一生——そう呼ぶにはあまりに短い期間だったけれど——かけて稼いだ、資産。

両親は学会でもそれなりに有名な研究者だったらしい。両親の仕事にも、そういった世界にもまるで関与のなかった僕にとっては、まったく実感のなかった話だけれど。死後判明した彼らの収入から、それははっきりと分かった。

しかし、有名な学者としての収入を得ていた割には——僕ら親子は、あまりにも質素すぎる生活を送っていた気がする。自分の家庭が本当は大金持ちだったことを、僕は両親の死後まで知ることにはなかった。その分、預金や保険金は、驚愕するほどに、それはもう莫大な額ではあったけれど。

「普通の生活がしたかったのか？ ははっ。本当に僕と似てるんだな。僕も普通の生活が一番いいと思うよ。けどさあ、もう少しリッチな思いくらいさせてくれてもよかったんじゃないか？」

苦笑いを浮かべながら、僕は独白を続ける。

彼らの死から、既に一年が経過しようとしていた。

孤独感は、既に薄らいだ。

だけど、この虚空感だけは——永久永遠一生涯かかってても、薄れることは、まして消えることなど、絶対にあり得ないのだろう。
「ったく。人に散々我慢させておいて、謝りもしないで逝っちまいやがって……」

いい加減、僕も両親の死を乗り切らなければならない。ならないというのに——

と、このタイミングを見計らったかのように、聞きなれた着信メロディーが僕のケータイから流れ出す。僕は通話ボタンをプッシュし、電話を耳に当てた。

「あ、虫くん？」

「いつもと違って短く非常に簡潔だが、断然一番傷ついたよ」

甘美な響きを含む心地のよい声で、平然と毒舌を僕に向ける——
花蓮。

毎晩。毎晩毎晩毎晩、本当に欠けることのないくらい毎晩、ほとんどこのタイミングで、天城花蓮は僕にナイトコールをしてくる。
しみりとした気持ちいを吹き飛ばすくらいに辛辣な毒舌を、僕に吐きつけるために。

「まあた元氣ないのね。この時間はいつもそう。なにしてんだか知らないけど、落ち込んでいる声を聞くとゾクゾクす——じゃなくてこっちまで暗い気分になるから、元氣出しなさい。命令。反論したら青酸カリ」

発言のところでどこに彼女の本性が見え隠れしている気もするが、花蓮は花蓮で、僕のことを心配してくれているということなのだろう。これが——散々毒舌を向けられようと、罵られようと、踏まれようと、僕が天城花蓮を嫌いになれない、むしろ好意を抱いてしまっている理由なのかもしれない。もしくは、ただ単に僕の性癖。
「しみりした声が聞きたくないなら、もう少し遅くに電話してきてくれればいいよ。そんなときやもう元氣だろうから」

「ばかね——」

僕の発言を、彼女は呆れたように鼻で笑うことで一蹴する——

「落ち込んでいるときに私の暴言でさらに追い詰めるのが、たまたなく快感なんじゃない」

彼女は電話の向こうで、いつものような、何の屈託もない腹黒笑顔を浮かべているように思えた。

「……ま、そうだな。僕もその方が快感だよ」

「うわ。変態。エロ。童貞。狂乱的マゾヒスト男」

「馬鹿な……反論できる要素がひとつもないだと……！」

「……少しは反論して。本気で引くから」

花蓮は僕を元氣付けようとしてくれているのか、それとも、ただの性癖なのか――

僕は花蓮の毒舌で元氣付けられているのか、それともただの性癖なのか――

そんなことは、もうどちらでもよかった。

「ふう……」

その後一時間ほど話をしたところで、花蓮との通話を終える。ああ、明日も朝からこんな毒舌を浴びるのか。昼も。そして、また夜も。

そう考えると、ゾクゾクす――非常に憂鬱だ。

「あつくーん、通話終わったー？」

ノックの音とともに、ドア越しに心奈の声が聞こえた。

「ああ――終わった」

「そっか」

ガチャリと扉を開けて、心奈が入ってくる。

薄い水色の、フリルをふんだんに使用したパジャマ姿。どうやら風呂上りのようで、髪の毛はごくわずかな湿り気を帯び、体はほのかな湯煙を上げていた。

いい加減見慣れてきたとはいえ、心奈のような美少女の湯上り直後のパジャマ姿には、どうにもそそるものがある。ぶっちゃけエロい。パジャマは薄いし。

「相変わらず――変態さんなんだね、あつくんは」

心奈はため息をつきながら、呆れたようにぼやく。

「また、ココロを読みやがったのか……」

「違う違う、顔でわかったよ。エッチっぽい顔で」

「何を言うか。僕はこれまで見た目だけは紳士のようなだと2人の女子に言われたことがある」

「それはそれは…… ツツコミどころたくさんある台詞だね。ウソじやないから尚更」

僕の発言が虚偽ではないとはつきり分かるということは——彼女はまた、あの“力”を使っているのだろぅ。

人のココロを、自由に読む力。

使用禁止とはいっても、それはあくまで目安のようなもので、強制ではないから。彼女はこの17年間、この“力”と共に生きてきた。この“力”に支えられ、生きてきた。それは今さら、簡単に手放せるものなんかじゃないと思うから。強制なんて真似は、僕にはできなかった。

「まったく、あつくくんは寝ても覚めてもエッチなことばかりだね。私はいつ教われちゃうんだろぅ？ にやはは」

それでも僕は、彼女に“力”を使ってほしくはなかった。

使ってほしくなかった。

だから今回も、こうして彼女を咎めるのだ。

「こら心奈。禁止だつて——約束だろ」

第一話「ココロとこころと心と心奈」

—— i s t h e e n d

第二話「天上花蓮の平日な休日」(上)

1

天城花蓮からのモーニングコールともナイトコールともとれない電話によって僕が半ば強制的に覚醒させられたとき、目覚まし時計の時刻はちょうど真夜中の四時を示していた。

睡眠開始から三時間と半刻が経過、起床まではあと三時間もの猶予がある。寝起きということでは頭はぼやけ、すべからく即座に電話に出ることなどできなかったが、思考よりも危機能力察知の本能がまず働いたようで、さほどの間を空けることなく電話に応答することができた。命拾いした。

「……いま何時だと思ってる」

「午前四時一分三十二秒」

どうやら分かっていた上で電話してきたようだった。

かなり性質タチが悪い。

「あの……これ以上ないくらいに真夜中なんですけど?」

「知ってる」

どうやら知っていた上で電話してきたようだった。

かなり性格が悪い。

「……嫌がらせか?」

「うん」

どうやら嫌がらせらしかった。

彼女の性質も性格も、邪悪にして極悪にして巨悪であることは疑いもなく明らかであった。なんというか、性根が黒すぎる。

純白ならぬ、純黒。

即座に電話を切りたくなった。

「……って言いたいところなんだけどね。今回は違います」

どうやら違っらしかった。

彼女の性格に関する前述を撤回するつもりはないが、今回ばかりは悪戯半分嫌がらせて僕に電話してきたわけではないらしい。なんと珍しいこと。うまくすれば、10月の雪景色を拝めるかもしれない。

あまりの珍現象に言葉を失っていた（心中では饒舌なくらい失礼なことを考えてはいたが）僕は、花蓮の「なんか失礼なこと考えてない？」という声で現実に戻される。

「……で？ お前が嫌がらせじゃないとすれば何の用事だよ？」

「……あなた、私が嫌がらせ以外では用事がないとも思っているわけ？」

悪いが、その質問に関しては全面的にイエスと言わせていただく他はない。嫌がらせをひとつの用事として成立させてしまうような腹黒い輩を、僕は花蓮以外には知らないのだから。

それよりも、用事ってなんだろう。

こんな真夜中に電話をしてくるくらいだから、仮にこの行為が悪戯でないとすれば、何か重要な用事である可能性がないわけじゃない。

「……………」

「……？」

しかし——沈黙。

花蓮の次の言葉を待っているものの、一向に花蓮が口を開く気配はない。

電話から離れているのか。

——いや。

呼吸、息遣いは聞こえる。

花蓮が僕と同じように電話を耳に当てているのは確かだった。

長時間の沈黙に耐えかね、僕から話を切り出そうとすると「……やっぱいいわ」というややトーンの落ちた声が電話越しに聞こえてきた。

「え？ やっぱいいって——お前、用事があつたから電話してきたんだろう？」

「ま、そうなんだけどね。眠いからいい。あなたもこんな時間まで起きてないで早く寝なさい」

起こしたのは完全にお前だが。

花蓮は「それじゃね」と言っただかと思うと、僕が引き留める間もなく一方的に通話を終了させてしまった。

「……………」

理不尽である。

極めて理不尽である。

こんな真夜中に人を起こしておいて、勝手に、それも一方的に話を終わらせた花蓮。明日からあいつのあだ名は“李 夫人”に決定だ。なんだか素敵な響き。

「つたく——なんなんだかね」

ともかく。

これでまた眠れる。

気がつけば電池残量が限りなく0に近かった携帯電話をACアダプタに接続させ、僕は再び布団をかぶると、早々に睡眠の姿勢に入する。

「……………」

……………」

……………」

……………」

ああ、気になるな、畜生。

大体だ。こんな夜中に突然起こされたら、目だって覚めちまうというもの。

僕はACアダプタに接続されたままのケータイ電話を開き、メール画面を表示、そのまま花蓮に『本当に大丈夫か？ 話あるならいつでも聞くぞ』という旨のメールを送った。

花蓮——毒は吐くが、嘘は吐かないやつだ（もつとも、それは僕

に対する中傷が花蓮の偽りない本当の気持ちということになってしまうが)。そもそも、嫌がらせなら嫌がらせだと言い切るタイプの女である。おまけにかなりの強がりときている。

用事があったというのは――おそらく本当のことなのだろう。

わざわざ起こしたなら、最後まで聞かせる。馬鹿。

その後数秒の間を隔てて、花蓮からメールが返ってきた。

以下、内容。

『レールガンって知ってる？ 電磁加速砲とも言って、物体を電磁誘導で加速させて打ち出す兵器なのだけど。あれ、当たると痛そうだよな？ 本当に痛そう。あ、いや。体の半分くらいは一瞬で持っていかれちゃうから、痛いと感じる間もないかな？ でもさ、当たの方は結構爽快だと思わない？ なんていうか、ストレス解消？ 壁とか古くなった建物とかに当てる分には、道徳的な問題はないだろうし。というわけで、至急レールガンを手に入れて、私に献上して頂戴。あなたに当てたいと思うから。あ、それと……』

「……………」
ぱたりと。

携帯電話を閉じる。

うん。

もう見ていられない。

ていうか途中でやめた。

こんな壮絶な文章を考え出し、数秒で打てるものなのか。どんだけ僕に殺意抱いてるんだよ。

「……………寝る」

思えばこのとき、最後までメールを読んでいたのよかったのだ。加虐的で有毒で辛辣な言葉で飾り立てられたメールに込められた、本意に気づくべきだったのだ。

僕は。

予想することすらできなかった。

花蓮の、彼女の置かれている状況に。

このときは、まだ。
『あ、それとも私に当ててくれる?』

2

言及すべき長所も特筆すべき取り柄もこれといった才能も持ち合わせていない僕が他人に誇れるものがあるとすれば、悲しいかな、それは勘の鋭さくらいのものである。

“勘”と聞いて。

馬鹿にすること勿れ。

長所も取り柄も才能をも犠牲にしてまで手に入れたその“勘”に、僕は今まで数え切れないくらい多くの場面で救われてきたのである。毛ほどの根拠もないような勘を狂信的に信奉する僕を人は哀れみ憐れむが、そんな他者からの憐情こそ毛ほども気にならないまでに、僕は、自身の勘に対して絶対的な信頼を置いているのだった。

その自慢の勘を以ってして、僕は漠然と予想していたのだ。

真夜中、花蓮によって叩き起こされたときから。

こんな事態に陥るであろうことを。

目を覚ましたときには、既に始業時間を過ぎていた。

端的に言えば、寝過ごした。

「……なんで」

なんで起こしてくれなかった、心奈よ。

一緒に住んでいるのだから、せめて起こしてくれたっていいじゃないか。

まあ、心奈は普段から僕に対しての気遣いなど微塵も見せることはないの、今さら驚くべきことではないが。そもそもすべての責任は、目覚まし時計に対し徹底的にシカトを決め込んでしまった僕自身にある。

それにしても。

単位数ぎりぎりだというのに、僕という奴は……。

「でも、今さら行く気にはなんねえんだよな……」

現在時刻、午前十時五分。既に二限の授業が始まってしまっている時刻である。

単位的にもっとも深刻な状況にある数学の時間にはもう間に合うわけもないので、なんというか、焦って準備してまで、また今から準備して行ったところで三限の授業には突入してしまっているだろうし、とても学校へ行く気にはなれなかった。

「……」

よし。

さぼってしまおう。

なあに。今日一日くらいさぼったところで、卒業に影響したりなんてしないさ。

しないはずだ。

「うむ。しない」

納得して、僕は、とりあえずベッドから出ることにした。うつかりすると三度寝という若者としてあっちゃいけないような不健全極まりない事態に陥りかねない。

しかし、さて——学校に行かないとなると、まるで暇になってしまった。

だったら学校行けよ、とも思うものの、一度さぼりを決め込んだ僕の頑固で強靱な意志は、梃子でも動いてくれそうにない。もはや自堕落の塊である。

こんな家にいてもやることはない——余談だが、趣味の一つであったテレビゲームは心奈の手によって完膚なきまでに破壊されてしまった。詳しくは後ほど——ので、街中へと出掛けることにする。こんな真っ昼間からパソコンに向かうというのも、なんとなしに二ートを連想させる行為な気がしたので自粛しておいた。

流石に学校をさぼっておいて制服で街中をうろつくわけにもいか

ないだろう。僕は制服でなく私服に着替え、ひと通りの準備を済ませると、早々に家を出た。

庭には通学用の自転車が停めてあったが、別に急いでいるというわけでもなく、むしろ時間潰しが目的であるし、駐輪場の料金（40円）を払うのも勿体ないので、僕は歩いて街中まで向かう。まあ、歩くのは好きだし。何か特別な理由があって好き、というわけではないけれど、無論、健康的であるというような理由からでもないけれど、ともかく、こうやって歩きながらゆっくりと目的地へと向かうのは、嫌いじゃなかった。移動手段としての自転車や自動車にはない、なにか不思議な趣——漠然としてはいるが、適度な疲労感や満足感のようなものが、徒歩にはある。

うつむ。

我ながら、なんだか詩人みたいだ。

そんな風流心なんて塵ほども持ち合わせていないくせに。

そういえば先日、“和歌づくりに挑戦”なるなんとも趣旨のよく分からない授業が行われたのだが、その授業の中で僕が作り上げた和歌は、十段階十点満点中マイナス六点という限界を突破した記録を叩き出した。やはり下ネタはまずかったらしい。（ちなみに武羅雄は採点不可。ばかしを入れないと公表すらできない代物を創造した。）

——と。

街中に近づくにつれ、段々と数を増していく人混み——その中に、見慣れた人物を見つけた。

伯愛学園高等部の制服。二つのクロワッサンがぶら下がったような、名称不明の髪型（しかしその髪型がまた驚くほど似合っていて、優雅で上品な雰囲気惜しみなく醸し出している）。周囲の男の視線を釘付けにするほどの美貌を持った少女。

天上花蓮。

完全無欠の毒舌魔。

「あいつ……」

学校にも行かないで、平日の昼間からこんなところで何をやっているんだ。

そんな、自分のことなどまるで棚上げしたような極めて自己中心的な疑問を浮かべつつ、僕は花蓮に近づいてゆく。

そして。

「動くな」

銃の形を真似た右手を、花蓮の背中に突きつける。

花蓮は。

「……っ！」

と、少し身体を強張らせると、歩みを止めた。

「俺はこの町に潜伏している殺人犯だ。今までに五人もの市民を惨殺した。ほら、“コイツ”の感触が分かるだろ？」

そう言つて、僕は右手を花蓮の背中にぐりぐりと押し付ける。花蓮は“びくん”と再び身体を緊張させ、驚きで乱れた呼吸を落ち着けるためだろう、一度大きく深呼吸をした。

「——抵抗はしません。何がお望みですか？」

少し震えた声で、花蓮は答える。

いや。

声だけでなく、身体も震えていた。

……あれ？

おやおや？

もしかしてこの子、僕が本当に殺人犯だと思つてしまつている？
にやり——と。

僕の顔が、とてつもなく邪悪な笑みに歪んでいるであろうことが、自分でも分かつた。

これは——チャンスだ。

神様が僕に下さつた、千載一遇にして唯一無二の超好機。

なるほどそう考えれば、花蓮が夜中に僕を叩き起こしたことも、僕が今朝寝過ごしてしまったことも、心奈の手によってゲームが破壊されてしまったことも、すべては偉大なる神のお導きというわけ

か。

何たる行幸。

何たる加護。

神よ。今までの失礼な振る舞いをどうかお許してください。

「そうだな……。まずはこの場で、《私は変態です。醜いメス猫です》とでも言ってもらおうか」

普段の僕にはあるまじきサディスティックな発言。

まあ、たまには僕にも仕返しくらいさせろ。いつも僕がやられてばかりじゃとても釣り合いが取れない。いくら僕が自他共に認めるマゾヒストだったとしても、精神を崩壊させるような暴言に耐え得る人間だったとしても、むしろそれを甘んじて受けているのだとしても、千回に一回くらいは反撃もしたくなるというもの。

だから、せめて今だけは。

この憐れな少女で、楽しみ愉しみ楽しみ娛むとしよう。

「……私にも、プライドというものがあります。抵抗はしませんが、理不尽な要求には——従うことは、できません」

身体を震わせながらも、声を震わせながらも、彼女は芯の強さを見せつけるかのような発言を、僕に返す。

しかし。

——この構図は、少しまずい。

完全に僕が悪役である（もちろん悪役ということに変わりはないが、花蓮は普段から僕に対して常軌を逸した嫌がらせと暴言の嵐を浴びせてくるので、今僕が行っているような行為は所詮可愛い悪戯のレベルに過ぎない）。要求内容を若干柔和することにする。

「ならば、ニヤーとでも啼け。それくらいはできるだろう」

「……にや、にやあ……」

「……」

思わず絶叫しなくなった。

想像以上の破壊力。

大量殺戮兵器。

尋常じゃなかった。

冗談じゃないぞ、本当に。

「……？ どうしました？ これで開放していただけるのですか？」

「……え？ あ、いや」

いけない。

僕がやられてどうする。

思考を切り替えて、僕は。

「お前は女子高生……だな。その制服は伯愛学園のものか。顔の造りは美人だが、やはりまだ幼さは残っている。だったらだ。好きな男くらいはいるよな。……名前を言え」

花蓮だけれど。

残酷で残酷で毒舌で辛辣で非人道的で非倫理的で非道德的な花蓮だけれど。

それでも、思春期の女子学生であることに変わりはないのだから。好きな人とまではいかないにしても、気になる男くらいはいて然るべきというものである。こんな方法で好きな人を聞き出す僕こそ非道といえるかもしれないが、またそれは紛れもなく疑いもなく真実であるけれど、それでもこの好機を逃す手はなかった。

男に対し興味がある素振りなど、微塵も見せることはない花蓮。

彼女の心は、彼女の視線は、一体誰に対して向けられているのか。

正直言って、気になってしまっている。

「白河——純史」

刹那。

僕は、自分の耳を疑った。

聴神経が、絡まって、ほつれて、乱れて。

きつと。

これは幻聴だと。

そう思った。

「優しくて……私が何を言っても、平気な顔してるんですよ。自分の中にたまったストレスをぶつけて、ぶつけて……普通ならもう壊

れていてもいいくらいなのに、全然ものともしないで。だから、私も甘えてしまうんです。そんな彼の優しさに」

普段と異なっているのは、どうやら僕だけではなかったようで。声。

透き通るように真っ直ぐで、甘美な心地よさは変わらず、しかし平時の花蓮からは想像できないくらいに柔らかな——声。

美しいと。

そう感じた。

彼女の言葉が、聴神経の異常による幻聴ではないと、はつきり理解できた。

「おつちよこちよいで。救いようのない馬鹿だけど。そんな短所に負けないくらいの優しさと、意志の強さを持っている。そんな純史のことが、私は——」

僕は。

僕の手は、いつの間にか花蓮の背中から離れていた。所在なさそうに宙へ彷徨うその手のひらには、大量の汗が滲んでいた。

そして。

「——心の底から、反吐が出るくらい大嫌いです」

「……」

あれ？

あれあれ？

あれあれあれ？

おかしいな。聞き間違いかな。文脈と前振りをまるで無視した言葉が花蓮の口から放たれたような気がしたけど。うん？聞き間違いじゃないって、僕の聴細胞も聴神経も至って正常だって、さっきはつきりしつかり理解したはずなのに。

「大体、気持ちが悪いですよ。だってやられて喜んでるんですよ？ うわぁ……ってなりません？ むしろ、おえ……ってなりますよね。はぁ。思い出したら鳥肌が。将来は絶対にSMクラブとかに出没しそうですよね。いじめて、いじめて……って。いじめてくれない

いと死んじやうぞうって。マゾっていうか変態かな。性癖っていうか性欲？ ははは、すみませんちよっとトイレで吐いてきてもいいですか？」

「……………」

どうやら幻聴などではなかったようだった。つくづく聞き間違えなどではなかったら良かった。

さすがに幻聴にここまでの破壊力はない。なんだか鼻の上辺りがツーンとしてきた。

ていうか、そこまで言うか？

そもそもお前、今お前の後ろにいる人間は僕じゃなくて、殺人犯だと思い込んでいるはずだろう。

君が今放った台詞、すべて他人に向けられているんだよ？ 本人でも知り合いでもなく、初対面の人間に向けられているんだよ？ 友達に対する残酷なまでの悪口を、まるで関わりのない人間にまで言っちゃうわけ？

しかも僕はSMクラブになんぞ未来永劫訪問する気はない！

第一、お前だって女王様として出没しそудよ！

「好きな人は……すみません、いません。本当に。でも、嫌いな人なら間違はなく白河純史です。断言できます」

断言しちゃうなよ。

そこはほかそうよ。武羅雄の和歌くらいにはほかそうよ。

頬を伝うこの暖かな感触は一体。

「嫌いです」

分かったから。

分かったからもう言わなくていいよ。

しつこいよ。

もう黙れ。

つか、もしかしてこいつ、僕の正体に気付いてるんじゃないのか。

「他に何か要求はありませんか？」

花蓮はこちらを振り向かず、言った。

僕は。

悲しみのあまり、言葉を口にするこすらできなかった。
今声を出してしまつたら……涙声なのが完全にばれる。

「あの……どうしました？ 殺人犯さん？」

「……」

「ねえ？ ねえ？ どうしたんです？ 次の要求を。早く」

「……」

「もしもし……」

「……」

「は。もう終わり？ 虫が」

「おい……」

やっぱ気付いてんじゃねえか！

花蓮はようやくこちらを振り向くと、いつも通りの邪悪な笑みを
浮かべた。

その笑顔は。

先ほど僕が浮かべたような子悪党の笑顔とは、まるで一線を画し
たものであった。

まさにこれこそが、本物の——悪魔の微笑
エヴィルス・インフェルノ

「いつから気付いていた？」

「最初から。《動くな》なんてこんな街中で宣言しちゃうお馬鹿さ
んは、あなたくらいしかないから。それに、銃と指の感触の差く
らい私にだって区別できるに決まっているでしょう。まあ、一番の
ヒントはあなたの耳に障る不愉快な声だけれど。遊んであげてたの
よ。あー面白かった。乗り気になっちゃって、まあ……」

ほんと腹黒いよ！

しかもなんでお前の台詞にはいちいち僕に対する暴言が伴うんだ。
第一——突然、背中に指を押し付けられて脅迫されたら、普通は
正常な思考なんて働かない。背中に押し付けられている物体はなに
か、という疑問よりもまず、背中になにかを押し付けられている、

という事態に恐怖を覚えてしまつというものだ。

天城花蓮。

つくづく恐ろしい女である。

たとえそれが、神のお導きであろうとも。

もう彼女を敵には回すまいと、心の底から決意した。

「……で、あなたの用事はなに？　ちなみに私は暇つぶしに歩いていたわ。あなたにどんな用事があるうと、たとえそれがあなたの葬式であろうと——私の暇つぶしが優先されるけれど。それでも一応聞いておきましょう」

「……」

もう突っ込むまい。

こいつは清々しいくらいいつも通りである。やはり花蓮の甘美で突き抜けるような声色は、残酷な台詞にこそ似合うというものだろう。なんというか、しつくりくるといふか。僕がマゾヒストだから、暴言を向けられて喜んでいるなどということでは、断じてない。

ところで。

用事が……。いざ問われてみると、どうだろう。正直、花蓮を見かけたからだ声をかけただけだったから。これといった用事があったわけでもない。花蓮ではないが、僕とて暇つぶしの域を出てはいないのである。

「まあ、僕も暇つぶしだよ。学校にも行かないで、こんなところで何をやってんだろうつて思つてさ。そんで声をかけてみた。」

「あら？　それはまた自分のことをこれでもかというくらいに棚上げした質問ね」

あらかじめ自分で突っ込んでおいたのに、再び突っ込まれてしまった。

まあ——確かに、お互い学生であるのにも関わらず、こうして僕と平日（しかも真つ昼間）の街中で出会うのは、彼女にとっても不思議、というか普通ではないことだから。しかし僕は、寝坊した、なんてありきたりな理由ではあるのだけれど、花蓮は一体どうい

経緯で、どんな理由で街をうつっていたのだろうか。僕と同じく寝坊。それはないか。

ちなみに花蓮の自宅は、不必要なまでに巨大な純和風の屋敷である。何度かお邪魔した（連行された）こともあり、初めて花蓮の住む屋敷を拝見したときには、そのあまりの巨大さに驚々愕々としたものだった。庭に巨大な池と獅子脅しのある家屋を見たのはそのときが初めてだった。そして今どき、家に複数名の女中がいる。メイドではなく、女中である。しかしまたその女中さんの一人がとつもない美人で。和服の似合う大和撫子といった感じの方で。彼女と花蓮とのツーショットは、見るだけで軽く五回は失神できるほどの衝撃的かつ魅力的な光景だった。

まあ、そんなわけで。

花蓮は毎朝その女中さんに起こされることになっているらしいので、寝坊という可能性は皆無なのである。

「まあ、言うまでもないだろうけどさ。僕は寝坊し」

「ちなみに私はただの気まぐれよ。なんとなく今日は学校に行きたくない気分だっただけ。たまにはそんなこともあるでしょう？」

「……」

確かにそんなこともある。

そんなこともあるけどさあ。

僕がしゃべっている途中に、それを遮るように発言するなんて、そんなことしなくてもいいじゃないか。

「ところで、あなたはこれからどこに向かうところ？」

この女、僕が悲しむいとまさえ与えてはくれないようである。

「……や、僕はさっきも言ったようにただの暇つぶしだから。特定の目的地ってのはないんだけどな。まあ、今から街中でも行こうかなって思ってたところ」

「まあ、それはそれは。光栄に思いなさい」

花蓮は、ぱちんと大きな音を立てて胸の前で手を合わせたかと思うと、どこか誇らしそうに、それでいて漠然と僕を見下したふうに、

そう言った。

「あなたの暇つぶしに。私も付き合ってあげるとしましょう」

第二話「天上花蓮の平日な休日」（中）

3

特定の人物に対する個人的な印象など、それこそまさに相対的であつて人それぞれであるというのは言及するまでもなく当然のことだけれど、それでも天上花蓮に対する僕と僕以外の人間が抱いている印象とでは、雲と泥、月とすっぽんほどの差異が確固として存在していた。

例えば。

美人——これは例外的に、疑いなく共通した認識である。百人が百人まで、彼女を美人と評価することに対し微塵の迷いすら生じさせまい。否定するのは平安時代の貴族か、よほどの捻くれ者か。いわゆるブス専という人種もこの世には存在しているらしいが、彼らの“美人でない人にときめく”という性癖は裏を返せば美人とそうでない人間の区別が明確についているということになるのだから、彼らとて花蓮の美しさを否定することはしないはずである。

優しい——まあ、これも辛うじて許容範囲内の共通印象であるといえなくもない。鉄鎖で雁字搦め（がんじがらめ）にされ、その上で開錠不可の鉄箱（鎖つき）に入れられ封印されたような出現率の極めて低い優しさではあるが、時折顔を除かせることがないわけでもないし。

物腰が柔らかい——この辺りから、花蓮に対する僕らの印象に相違が生じてくる。もっとも、花蓮の物腰の柔らかさを正面から否定し続けているのは僕一人くらいのものだけれど。僕としては、それがさも当然であるかのように辛辣な暴言をぶつけてくる花蓮が、とても物腰の柔らかい、そんな親切で人当たりのよい人物であるとは思えない。というか真逆の人間であるとすら思う。

言葉遣いが優しい——いや、花蓮に対しこういった印象を抱いて

いる人間の価値観を否定する権利なんて僕にはないけれど、ちょっと意味がわからない。一体どこをどう判断したらそういう結論に至るのだろう。言葉遣いが丁寧、というのならまだ理解できなくもないものの、それが“優しい”となると、果たして僕には理解の及ばぬところである。

「なにさつきから一人でぶつぶつ言っているのかしら……。気持ちが悪いわ。だめ、鳥肌が……」

「……」

ほら、こんなことを躊躇なく口にできるやつなんだよ!?

みんな目を覚まそう!

君たちは騙されているんだ!

「なあ花蓮。ちょっといいか?」

「3文字以内でなら発言を許可します。……あー、質問で既に3文字を超えちゃってるわね。残念でした。でも仕方がない。今日だけは許可しましょう。純史の汚らしい声が大気を汚染することを」

「……」

ちょっと質問の許可を得るだけでも、これである。

いちいち僕を傷つけなきゃ会話がきんのだろうか、この女は話しているのが僕でなければ、この生粋のマゾヒストである僕でなければ、精神をおかしくしてしまうのではないか。僕でよかったなあ、花蓮。

「ああ、安心して。あなた以外の人間にはちゃんと優しく接することになっているから」

「……」

どうやら僕以外の人間にはちゃんと優しく接することになっているらしかった。

まあ、つまるところはそういうことなのである。

辛辣にして伶俐にして残虐な態度は僕に対してのみ向けられるもので、端的に言ってしまうえば、僕だけが差別されてしまっている。“好きな人には意地悪をしたくなる”——そんなロマンティックで可

愛らしい理由ならばと何度思ったことが分からないけれど、しかし、先ほどの発言からの分かるよう、その可能性はまるで皆無なのだった。

それに。

僕以外の人間に接するときの花蓮——僕は裏花蓮と呼んでいる——は、そりゃあもう男の理想ともいえるほどに優雅で。親切で。その名の通り可憐で。正直、僕もそんな花蓮に優しくされたいという本音を隠し持っていた。マゾヒストを自称しているだけあって中傷には耐性があるけれど、やっぱり男としては。こんな美女には優しくされたいというもの。

「なあ花蓮」

「何かしら」

「ちよつと僕にできる限り優しく言葉をかけてくれないか」

「……純史くん。私に何かできることはない？ 最近、元気がなさそうだから……。困っていることとか悩んでいることとかあったら教えてくれたら嬉しい。あなたがどうして困っているのか知りたいし、何に悩んでいるのかも知りたいの。私にできることなら、何でもやるから。あなたを余計に困らせるためなら、何でも……」

「もういい！」

どうしても僕を傷つけないのかよ！

困っていても悩んでいてもお前にだけは絶対に相談しないからな！
弱みとか見せたらもう僕の人生そのものが終わりそうだよ！

「はあ。ところでさ、花蓮どこ行きたい？ 僕は暇つぶしに來ただけだからさ、特に行きたいところとかないんだけど」

「ああ、また無駄なCO2が……。そうね……。ゲーセン」

「お前、ファンの人間が聞いたら本当に泣くぞ……」

それと、なんの脈絡もなく僕を中傷するのはやめてくれないか。

……しかし、ゲームセンターね。

まあ、悪くはないかもしれない。最近僕もご無沙汰だったし。実情を言わせてもらえば、最近特別課題やら補習やら追試の勉強

やらで、余暇時間を娯楽や趣味に回すことができなかったのである。苦手教科は徹底的に苦手（数学や物理は本当に苦手だ。数字なんて見たくもない）な僕だから、いずれは困難が襲ってくるとは思っていたけれど。まさかこれほど苦しい展開になってしまうとまでは予想していなかった。で、ようやく開放されたのが、3日前のこと。「ま、いいかもな。補習やらも終わつたし、今日からは遊びつくす」「はあ、補習ね。……しかし、わからないわ。純史、ミジンコ並の知能の割に、国語や社会や英語の成績は学園の中でもそこそ良い方じゃない。数学とか理科だって、勉強すればできるはずでしょう」「うーん、きつと勉強してもできない気がするよ。僕は馬鹿だから、考えることとかは苦手だし。閃きってやつもないしね」

社会や英語は、とにかくひたすら暗記することで成績を伸ばしてきたけれど。国語は……まあ持ち前の勘の鋭さで解いてきたけれど。数学や理科のように論理的に考える科目は、どうにも苦手だった。たぶん、IQが致命的に低いのだと思う。要するに思考することが苦手なのだ。

そんな僕だから、後先考えずに。

それがどんな事態を、結果を招くかも思考せずに。

あんな取り返しのつかないことをやらかした。

僕がもつと考えていれば。考えることができたならば。

きつと、彼女は。

こんなにも苦しむことはなかった。

絶望を味わうことはなかった。

生きることは、なかった。

僕の罪。

僕の業。

僕の。

僕の。

僕の。

僕の――

「暗い」

「——え？」

ふと、花蓮の澄んだ声。

隣を見ると、とてつもなく不機嫌そうな花蓮の顔が、そこにあった。「あなた、私と一緒にいるっていうのに暗すぎるわ。分からないかしら。私と二人きりで出掛けられるのが、どれだけ光栄なことか。どれだけ名誉なことか。それなのに、そんなに暗い顔をして……。いつもそうよ。純史は突然暗い顔になるわ。何かに絶望しているような、何かを必死で責めているような……。そんな、本当に不細工な顔になるわ」

花蓮は相変わらず、尊大な態度を崩すことはなかったけれど。それでも。

「だから——私はあなたを中傷するわ。だって気に食わないんだもの、その顔。あなたは私の言葉にだけ絶望して、ただ私に責められていればいいのよ」

花蓮の言葉に、悪意を感じることはなかった。
むしろ——安心感を。

慰安感を。

温かみを、感じてしまっていた。

「……あいかわらずめちゃくちゃだよ、お前は」

「あら。あなただって喜んでいるじゃない」

——まあ。

花蓮の言う通り、僕は。

確かに、喜んでいるのだろう。

心から、望んでいるのだろう。

花蓮が向ける、容赦のない中傷を。

花蓮が放つ、残虐な暴言を。

花蓮がふるう、最高の毒舌を。

まったく——とんだマゾヒストだな、僕は。

「——んじゃ、ゲーセンでいつもの仕返しといきますか。勝負勝負」

「勝負つていうのはね、少なくとも実力の拮抗している両者の間で使われる言葉なのよ。私たちの間には、泥と雲、月とすっぽんほどの実力差があるじゃない。……まあ——いじめてあげるわ。あなたの望みどおりにね——」

望みは。

僕の卑劣な望みは。

穢れきつた望みの内の一つは。

もう、十分過ぎるほどに。

既に、十全過ぎるまでに。

叶えられているのだった。

4

ゲームセンターを出た（ちなみにゲーム対決は僕の惨敗だった。

得意と自負しているゲームではことごとく敗北。おまけに花蓮はクレーンゲームで大量のぬいぐるみと、更にはデジタルカメラまで獲得してみせた。この女、かなりのゲームセンター常連である）僕たちは、そのままデパートに立ち寄ると軽いウインドウショッピングを楽しみ、その後、時刻と空腹具合を配慮して、この喫茶店へと立ち寄った。女性と街へ出掛けたときには、過剰な買い物に付き合わされた挙句に荷物持ちまでさせられると相場が決まっているはずなのだが、どうやら花蓮は現在進行形で現金を所持していないらしく、買い物云々の心配がなくなった代替として経費はすべて僕持ちという、どちらにせよ不本意な事態となってしまうた。この女、金も持たずに一体どこへ行くこうとしていたというのか。ていうか金持ちなんだから金くらい持つてこい。

「はあ……今さらになって学校さぼった罪悪感」

「何ごとも後悔ばかりしているとつまらない人間になるわよ。もう完全に完璧に完膚なきまでに手遅れだけれど」

食後のコーヒータム。今さらになつて姿を現し始めた罪悪感に苛まれつつ、僕は平常通り、花蓮の毒舌を浴びていた。今日だけで既にカウントできないまでに暴言を放たれ続けているので、もう直接的なツツコミを入れることはなくなっていたけれど、それでもやはり花蓮からの中傷は一向に止む気配を見せることはなく、僕の心の傷はひたすら深まってゆくばかりである。

「まあ、それは僕だって思うけどね。僕はいつだって後悔ばかりだ。駄目人間になっちまつてるのは否定しないよ」

「……妙に素直ね。つまらないわ」

認めたら認めたでつまらないと言われてしまう始末。

花蓮は僕に何を望んでいるのだろう。

というか僕はどうすりゃいいんだ。

「まあ、そうかもね。後悔をすることのない人間なんて、いないのかもしれないわね。かく言　う私だって後悔の連続よ。後悔して後悔して後悔して、最後まで後悔しているの。それこそ　自分の行動、一つ一つにね」

その後悔の中に僕に対する中傷が含まれているかどうかは甚だ以つて疑問極まりないところであるが、しかし、それにしたつて花蓮の発言は意外なものだった。花蓮は自分の行動に対して揺るぎない自信を抱いていると思つていたし、行動も、成果も、すべてが（人格を除いては）その自信に相応するものであると、僕の目には映つていたからである。

まあ。

“完璧”という状態が実現し得ない以上、人並みの理想を有する人間には、後悔なんて永遠に、普遍的に伴うものなのだろうけれど。天上花蓮。

僕以外のすべての人間に対しては、ごく品行方正。

容姿端麗。

成績優秀。

富裕の中に育ち。

運動だって器用にこなす。

僕のような一般庶民にしてみれば、彼女はあまりによくできた人間で。

遠く、足元にも及ばないまでに。

「ま、それでも僕はさ——」

それでも、おそらくは。

花蓮とて、完璧には程遠い人間なのだろう。

彼女とて、完全にはなり得ない人間なのだろう。

だから、後悔だってする。

僕らとはスケールの違うような後悔を。

だけど、それでも僕らと同じく後悔を。

「後悔したくないとは思わないな。そんなの、なんか成長しなさそうだし。少なくとも僕は、後悔の中から学んだことも、あるから」

後悔と反省。

意味は違うけれど、結果は同じ。

それなら。

「僕はこの先も、後悔し続けるだろうね。失敗したことを悔やみもしない、何も感じない、そんな無感情で無成長な人間にはなりたくないからな」

「……ほんと、どうしようもないわね。もう手遅れだって言ってるのに」

辛辣で無遠慮な言葉は相変わらずだったけれど。

それでも花蓮は、どうしようもないくらいに、きれいな笑顔で。

僕の言葉に、何となくだけれど、頷いてくれた……ような気が、しないでもなかった。

「……っかさ、花蓮」

「何よ？」

「昨日の夜中……いや、今日の夜中か。電話してきたろ。結局用

事はなんだったんだよ」

なんでもない、と。確かに言われたけれど。

心配して送ったメールの返事は、とんでもない内容だったけれど。それでも、気になるものは気になるのである。

「しつこい男は嫌いよ」

「……………」

すまん花蓮。今日は100バリエーション以上もの悪口をぶつけられてきたけれど、今のが一番傷ついた。

割と冗談通じない男なんだよ、僕。

冗談だって頭で分かっているけど、嫌いって言われるのは苦手なんだよ。

僕はへこんだ。

「……ちょ……なに本気で落ち込んでんのよ……」

本気で俯きこんでしまった僕の姿を見かねて、あるいは憐れんで、花蓮が僕に声をかけてくる。

しかし僕は俯いたまま、答えない。

「……………」

「いや、あの……さっきのは冗談で……」

「……………」

「ほら、あのさ……嘘だよ？ うそうそ！ 私が嫌いな人なんかと一緒にいるわけがないじゃない……ね？」

「……………」

「げ、元気だして純史。私、純史のことゴキブリ以下のド変態マゾヒスト男だって思ってるけど、それでも嫌いじゃないから、ね？ フォローしているつもりか。」

まあ、さすがにここまで落ち込んでいるというわけもなく、当然僕の沈黙は演技だったのだけれど、しかしもし僕が本気で落ち込んでいたとしたら、花蓮の言葉は必殺の一撃にもなりかねないのではないだろうか。

しかし。

花蓮が僕を慰める、なんて光景、めったに見られるもんじゃない。というかこれが初めてである。なんだか新鮮で楽しくなってきた。しまったので、もう少しだけ落ち込んだ演技を続けてみることにした。

「なんか言いなさいよ、ねえ。も、もしかして泣いちゃった？ うー…… 分からないわ。こんなときは、どうしたら……」

「あ、純史くん？ 聞こえてますか？ あ、謝ればいいのかしら。……うー、うー」

め……」

「……」

「うー、ごめ……ごめやっぱいいやめんどくさいから。あーめんど」
「途中で投げんなよ！」

“ごめ”まで出たんだから最後まで言おうよ！

最後の一文を言うのにどんだけの労力が必要なんだよ！

「やっぱ演技だったのね」

「ぐ……」

またもあしらわれていた僕。

花蓮に対してはもう敵対行動を起こさないと決めたはずだったけれど、そこはやはりやらねばなしというのはあまりに悔しすぎるので、地味な反逆を試みたわけだが。当然の如く、花蓮にはまるで通用していなかったらしい。

「まあ、それはともかくとして。僕って神経質だからさ。気になったことは気になったままにしておけないんだよ」

これは僕の勘だけだ。

あくまで勘に過ぎないけれど。

あるとき花蓮が言いかけたことは、このまま流していいような、そんな軽い、取るに足らない用事ではなかったように思うのだ。

根拠は何もないけれど。だって勘だから。

だけど、勘であるが故に、気になってしまう。

僕の勘はよく当たるから。

それこそ、超能力のように、魔法のように、軌跡のように。

“当たってしまう”から。

「神経質な男は嫌いよ」

「……………つてさすがに二回も演技するほどノリはよくないからね!？」

それでも再び嫌いと言われたことにわずかばかりのショックを覚えてしまうあたり、いい加減僕も冗談の通じぬ男である。

「ま、用事があったのは確かだけれど、そんなに急ぐ用事でもないからね。……また後にも言わせてもらおうよ」

「……そっか」

花蓮がそう言うのなら、僕はこれ以上追及すべきではないのだろう。

ひょっとすると、やはり言いたくないことなのかもしれない。一度言いかけて尚、再び鞄に収めてしまったのだから、あり得る。それを無理に聞き出してしまつては。

余計に傷を抉ることになつてしまうことも、あるから。

もつとも、花蓮の用事とやらがもつと単純な、下らない用件である可能性だつて十分にあり得るけれど。所詮は勘だ。

しかし、まあ。

いずれにせよ、花蓮が話してくれるのを待つことにしよう。

考えなしに深く入り込んでしまうのは、もうやめよう。

二度と、あんな罪を犯さないために。

消えることのない罪悪を、さらに濃厚にしてしまわないように。

僕はひたすら黙っていればいい。

必要とされた場合のみ、力を貸してあげる他はない。

「さ、暗い話はこれまで。せっかく学校をさぼっているのだから、せめてパーッと楽しみましょう。あなたを虐げることです」

「ああもう！ この一言さえなければなあ！」

暗くなりかけた話を明るく盛り上げる空気の読める人、というよ

うな好印象を犠牲にしてまで僕を中傷する必要がどこにあるのだろうか。いや、花蓮にとってはもう、必要だとか、必要じゃないとか、そういうレベルの話ではないかも知れないけれど。

「それじゃあ花蓮、しりとりでもしようぜ」

「しりとり？ 随分と子供っぽい遊びを」

しりとり——様々なローカルルールが存在する、非常に幅広く知られた、というより知らない人間はおそらくこの日本においては存在しないであろうシンプルなゲーム。しかし、シンプルであるが故に戦略は無数に存在する。この世に存在する無数の名詞。単純にやり合っていただけでは、おそらく永遠に終わらない。それをどう、自分の勝利という形で終わらせられるか。知識量と言葉のチョイスが鍵となるわけだ。

「子供っぽいなんて言うなよ。暇つぶしにはいいゲームなんだぜ？」

「ふうん。もう何年もやった記憶がないわね」

「ま、やってみようぜ。じゃあ……“しりとり”」

言いながら、僕は相手が次に口にするであろう言葉を予測し、反撃の手を考える。

“りんご” “りす” “リース” “リンパ液”……候補は莫大な数に上るが、さすがに二手目で言い淀むことはないだろう。ただ返すだけでなく、特定の字ばかりを相手に要求する技（僕はエレメンタル・ロックと呼んでたりする）をかましてやりたいところ。

花蓮は。

“離婚”」

冷静に、言った。

「……………」

たまにいるんだ。

一手目から間違えちまうアホな輩が。

すっかりミスしちゃってさ。それにしてもとんでもない単語で終わってくれた。

「いや、花蓮……」

「あっ……！」

花蓮は今になって気づいた様子で、今になって慌てて口を塞ぎ、今になって一度、咳き込みをした。

「今のはなしよ。だいたい、しりとりだからって“しりとり”からはじめるのはどうかと思うのだけれど。陳腐なあなたらしいわ」

「……………」

いや、“しりとり”から始めるって結構定番だと思うよ！？

それに反撃の手ならいくらでもあったはずだろ！？

そんなことで文句つけられても！！

と、そんなことを花蓮に言ったところで意見が受理される可能性はまるで皆無なので、僕は大人しく彼女に従うことにした。

「それじゃ……五十音の最初ってことで“あ”で始めるか。花蓮から始めるよ」

「“愛人”」

「……………」

わざとやってるわけじゃないよな……？

しかし花蓮、二連続でそれはない。いまだき幼稚園児でもそんなミスしない。

ていうかこいつ、頭良いくせにしりとりが苦手だったりする……？

それともまさか、しりとりなどというくだらない遊びに付き合っている暇はないとも言いたいのだろうか。

「……なに黙っているのよ。純史の番よ」

「いや、花蓮……お前」

「何よ……って、あっ——！」

ぽっかりと。

花蓮は口を開けたまま、硬直、停止する。

どうやら素で間違えていたらしい。

……勝てる？

僕は勝てる。

花蓮に勝てる。

しりとりならば、花蓮に勝てる！

今まで散々虐げられて、中傷されて、毒舌をぶつけられてきた僕だけれど。しりとりならば、仕返しができる。

にやり——と。

僕の顔が、とてつもなく邪悪な笑みに歪んでいるであろうことが、自分でも分かった。

これは——チャンスだ。

神様が僕に下さった、千載一遇にして唯一無二の超好機。

なるほどそう考えれば、僕たちが街中で出会ったことも、ゲームセンターで完膚なきまでに叩きのめされたことも、今の今まで容赦なく虐げられ続けていたことも、すべては偉大なる神の導きというわけか。

何たる行幸。

何たる加護。

神よ。今までの失礼な振る舞いをどうかお許してください。

「う、ウォーミングアップはここまでよ。次は文字も私から指定するわ。それじゃ、“馬鹿”」

「カゴ」

「ゴミ」

「晦日」

「カス」

「須磨」

「マゾヒスト」

「トルク」

「クズ」

「随筆」

「ずん胴」

「産毛」

「下衆野郎」

「海」

「ミジンコ」

「講座」

「ザコ」

「献立」

「底辺」……あ、負けてしまったわ」

「……」

どうしてだろうか

まるで勝った気がしねえ。

しりとりの中でまで僕に対する中傷を忘れないとは、さすがに恐れ入る。

ていうか精神的ダメージで判断すれば僕は完全に負けている。完膚なきまでに叩きのめされている。しりとりに勝ったのにまるで嬉しくない。

ああもう！泣きたいよ！

「あらあら……どうやら私、しりとりは弱いようね。それは認めるわ。よかったわね。唯一勝てるものができて。喜びなさいよ」

「喜べねえよ！ お前とはもうしとりしたくないよ！ しかも最後のラウンド、お前アレ全部僕の中傷じゃねえか！」

「それは自意識過剰じゃないかしら？ 全部偶然よ」

「普通なら本当の本当で偶然なんだろうけど、どうしてかな、お前の場合はずべてが意図されていたように思えてならないよ！」

これもあくまで勘ではあるが、しかし極めて百パーセントに近い確立で的中しているものと思われる。もう僕の勘のよさとかまるで関係なしに。多分、彼女の脳髄には何千語もの暴言（僕専用）が丁寧に保管されていて、彼女はそれを無意識のままに、それでいて容赦なく躊躇なく迷いなく僕にぶつけてくるのだろう。

反逆は無為にして無碍にして、無意味。

完全無欠の毒舌魔。

しりとりの流れさえも味方に付ける女神。

残虐なる女帝。

残酷なる邪神。

「さあ、今度は何をするのかしら？　いらっしやいな、純史。あなたを受け止めてあげるわ」

暗黒の笑顔はやはり、僕のような小悪党の笑みとは一線を画していたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447g/>

願わくは君とともに

2010年10月9日08時23分発行